

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2019年5月 NO.209



〔もくじ〕

2～3 第二十九回高知出版学術賞を審査して…佐藤恵里

4～5 ぼくとベース…弘田貴英

6～7 中央公民館に行こう!!

8～10 うつ病のミュージシャンと連れ添う…秋月ひなた

11 「アンテナ」デハラユキノリ氏との出会い…下尾仁

12～13 高知市文化振興事業団3～4月の事業から

14～15 風俗歳時記・風伯

高知出版学術賞を審査して

佐藤 恵里

本年は応募作品が五点だった。

以前は十〜二十点台で推移していたのが、東日本大震災の二〇一一年を境に十点台にとどまり、三年前の第二十六回は七点だった。大学や研究機関を侵食する成果第一の評価主義と、細切れの情報でわかった気になるスマホ文化とが覆う時勢が関わっているかもしれない。

「日々改革」の国是の下で自己評価報告書作成に追われ、業績数という質より量の呪縛に囚われる大学教員と、本よりスマホでレポートを仕上げる学生、また時間がかかるまどろこしい本よりスマホの方がなんぼか得という若者と等しい中高年たち。本を読まない・本が売れないの相関関係は、しう而して読み応えのある良書を駆逐し、簡単に読めて役に立つお手軽本の

増産を導く。

数年前、ある編集者から「中学生にもわかるように、難しいことは使わず、やさしく書いてください」といわれ、絶句した。辞書の一つも引かず、読むだけなら、それこそ表現力としての語彙が増える気づかいはない。大人になろうという志をもった中学生には迷惑な話だし、だいたい読者として想定する大人を中学生扱いするのは失敬ではないかと思ったのだ。文章のプロを自認する編集者がかく言うのは、それだけ日本語の文章が劣化し、または退嬰化していることになる。

一九九〇年創設の本賞は地方の一都市である高知市の文化振興事業団が主催し、高知県書店商業組合の協賛を得て実現したと聞く。学術賞の主催は新聞社や出版社、

大学・学会が多いなかで、希少である。その目的は「優れた学術研究が、地域の発展と文化の向上につとて極めて重要であることから、この振興を図るとともに、市民の教養に資する」（「高知出版学術賞要綱」）ことで、この見識の高さは誇っていいと思う。学術を地域の文化の向上の基と据えている。対象となるのが、高知県に関わるテーマの学術出版物か、県在住者の学術出版物で、後者の場合は高知県と無関係のテーマでもかまわない。ジャンルも文系・理系を問わず、啓蒙書、入門書、概説書、さらに記録・調査報告書等も含む。目的にふさわしい設定であろう。

もって読み解く点を中心に、その出版物が市民一般に知的益となりうるものということである。「要綱」中「対象」に「特定の研究者のみが理解可能な高度な専門書は除く」とあるのは、二〇〇〇年代に入って、学位論文あるいはそれに手を加えて出版した作品の応募が相次ぎ、その多くが学会の一部ないし著者自身と同好の士のみに寄与する閉じられた学術書であったからである。もちろん「高度な専門書」がすべて閉じられているわけではない。難しい専門用語や煩わしい分析の柵を一般読者に易々と越えさせて未知の世界と出合わせ、今の今まで知らなかったことを発見する喜びを与える、開かれた良書はしかとある。

なお、第二十五回から本賞に準じる形で、新たに特別賞を設けた。

この賞は、金高堂社長で、高知県書店商業組合副理事長として本賞の実現を援助した故吉村浩二氏（二〇一一年逝去）のご遺族から寄せられた寄付を基金として、三つの基準―①出版文化の向上に寄与するもの、②出版の労を称えるに値するもの、③とくに将来が嘱望され、奨励に値する著編者のもの―のいずれかに該当する作品に与えられることとした。

五月から令和の元号が始まる。

本賞は、「明日の千円より今日の百円」とは真逆の長いスパンに立って、平成の三十年を通して毎年選考委員の総意により良書を顕彰してきた。今後とも受賞者には大きな励ましとなり、受賞作が市民には豊かな知への誘いとなることを願っている。

さて、本年は、応募作品五点のうち第一次審査で絞り込んだ三点について七名の選考委員間で精読し、講評を持ち寄った。それらをもとに第二次審査で議論し、結果、総意として次の一点を特別賞に選

んだ。本賞に該当する作品はなかった。

特別賞

桐野 作人 著

龍馬暗殺

（吉川弘文館刊、四六判、256p）



龍馬暗殺

坂本龍馬と中岡慎太郎が襲われた近江屋事件については異説俗説がなお盛んである。

著者は鹿児島県出身で「歴史作家」（著者略歴）。本書は、近年の幕末史研究を踏まえ、今井信郎の二つの供述書を精査することで、近江屋事件の真犯人に関する定説―会津藩主・松平容保の命により、会津藩の武士で新選組とならぶ治安維持部隊である見廻り組のトッブ・佐々木只三郎が龍馬を暗殺し

た―を再検討・再確認すると同時に、これまで等閑視されがちだった会桑勢力の動向―会津・桑名両藩の大政奉還と薩土両藩への強い反発―に注目して、廃幕派對保幕派という新たな対立構図を設定することで、保幕派の会桑勢力が廃幕派諸藩の藩邸攻撃や要人テロを計画する極めて危険な状況下で、近江屋事件が起きたことを明らかにしている。

また、俗説である薩摩黒幕説について、史料から薩摩の潔白を証し、近江屋事件後の幕閣と土佐藩首脳との交渉の様子を追求するなど、新しい観点もみられる。加えて、龍馬が大政奉還を主導したとは「俗説」で、かの「船中八策」は「虚構」であるとするところは、龍馬像の新たな照射に与するものといえるだろう。

プロローグで本書の新手というべき五つの視点を示し、この問題意識のもとに、以下五章からなる本論が構成されているが、章や節に一切ナンバリングがないことも

あずかって、五つの視点と本論との関係性を読み取りがたい点が多々ある。また学術書には必須の索引がないことも惜しまれるが、膨大な史料を読み込み、参考文献を渉猟して、史実を客観と実証により引き出し、近江屋事件の「真相」を提示しようとした努力が評価される。幕末史研究に寄与するとともに、この期の歴史に関心のある一般読者には刺激的な一冊となる。出版の労を称えるに値するという点で、特別賞にふさわしい。

さとう えり

一九四八年香川県琴平町生まれ。高知県立大学名誉教授。第二十九回高知出版学術賞審査委員長。専門は日本演劇・芸能研究。著書に『歌舞伎・俄研究』（新典社）、『日本の舞台芸術における身体』（共著、晃洋書房）など。

ぼくはベース

弘田 貴英

【ベースとの出会い】

僕は学生時代から、ずっとバンド活動を続けています。楽器を始めたきっかけは、親戚の兄ちゃんでした。

ある日、「ギターをやりたい!」と宣言した兄ちゃん。憧れていた兄ちゃんの言葉に火が着いた僕は、「僕もやる! やりたい!!」と飛びつきました。

しかし、兄ちゃんから勧められたのは、ギターではなくベース。なぜベース?と疑問を抱きつつも、「これを練習したら兄ちゃんと一緒にバンドができる!」と期待で胸はいっぱいでした。

その日からベースの練習を始め、見た目のカッコよさで選んだB.



C. RICHのイーグルベースを、毎日毎日、指の皮がすりむけても弾き続けました。

ですが、残念ながら今日まで、とうとう兄ちゃんがバンドを組んでくれることはありませんでした。それが今もちよつと悔しいです。

【ベースの魅力】

エレキベースについて話をする
と、「何それ? ギターの簡単なやつ?」などと言われてしまうことが多いです。「あんまり意識して聴いたことない:」「地味:」という意見もよく分かります。正直、バンドにおいて華やかな立ち位置ではないかもしれませんが、がんばって上手に弾けた!と思っても、僕だけかもしれないが、目立たないしモテません。それでも僕はこの楽器が大好きです。

今回せっかくの機会をいただいたので、少しでも誰かが興味を持ってくれるとうれしいなと期待を込めつつ、ベースの魅力を書き綴っていききたいと思います。

演奏中、ベースは前に出て主張することもできますが、基本的にはバンドを低音で支える「土台」となります。ドラムなどの打楽器と一緒にリズムを強調したり、ギターなどのメロディーをカラフルに彩ることができたりします。地味に見えても、まさに「縁の下の力持ち」な楽器と言えるのではないのでしょうか。

また、一言で「ベース」といっても材質によって音は様々です。ピアノのように美しく響くものもあれば、バスドラムのように地を這うみたいな低音を出せるものもあります。どこか一つでもパーツが違えば別世界のような音を表現することができ、弾き方や材質にこだわると音との出会いを無限に楽しめます。

このように、ベースは良いところがたくさんある楽器です。楽器に触れて自分にとっての「ベスト」「好き」を見つけていくのは、人との出会いや自分探しにどこか似ているような気がして、とても楽しく感じます。

【バンド活動の中で】

バンド活動の中で色々な方と演

奏している、おもしろいことが起こります。

例えば、一人で練習して「完璧だ！」という音ができたとしても、スタジオでバンドメンバーと合わせてみると「なんか違う…」という結果になってしまうことがあるのです。そこから皆で話し合い、各々の音を見直していきます。少しずつ、その過程を繰り返していくと徐々にバランスが取れてきて、メンバー全員が納得できる良い演



奏が生まれてくるのです。

ふと気づくと、一人で練習していた音とは全く別のものができ上がったこともあります。そんなとき、一人だけでは見つけれなかった音に出会えて、とてもうれしい気持ちになります。その気持ちを、仲間と共有できるともつとうれしい。それがお客さんに伝われば感無量です。こうした気持ちはバンド活動をしているからこそ見つけられたものだと思います。

【今とこれから】

今は高知市で、「How to draw A castle」というバンドを中心に活動しています。

写真や絵でいうコラージュのような、フレイズ合わせで変化の多いアレンジに、毎回挑むような気持ちでスタジオに入らせていただいています。メンバーの音と自分のベースを合わせる度に、皆のアイデアに驚かされ、いつも新しい発見ができてとても楽しい毎日です。ギターやピアノと違って、

ベースは単体でライブをすることはあまりありません。

役割はシンブルで目立たない。だからこそ、人の楽器を輝かせることができ、たくさん音を繋いでいくことができます。僕はいつも、ベースという楽器を「音と音、人と人とを繋ぐ、接着剤みたいな」と感じています。

人や音が出会うと、喜びを分かち合うことができます。時にはぶつかることもあるかもしれませんが、お互いに譲り合って、少しずつ歩み寄ってみれば何かが生まれるはずだと信じています。またバンドだけではなく、仕事でも、友だちや誰かと会うときにも、僕はそんな橋渡しの役割ができる人でありたいです。

まだまだ人としても、演奏者としても未熟ですが、これから大好きなベースと一緒に、誰かと誰かの「接着剤」を目指して頑張っていきたいと思います。



中央が筆者

ひろた たかひで

一九八九年生まれ 高知市出身
高知市在住

親戚の影響を受けてベースを始め、仕事のかたわら、バンド活動を行っている。五月十二日（日）に城西公園で開催するP I C N I C I N T H E P A R Kに出演予定。入場無料。

中央公民館に行こう!!

高知市立中央公民館は、昭和二十六年四月に開館して以来、六十七年間にわたって高知市の生涯学習の拠点施設として、多くの市民に利用いただいています。平成十四年に文化の拠点として「高知市文化プラザかるぼーと」が建設されてからは、かるぼーとの九階から十一階に移り、各種事業を実施しています。

【公民館事業】

公民館事業として、各種講座を実施しています。趣味や実生活に活かせる知識や技術を学びながら、創造の喜びや受講生同士の交流を目的とし、仲間づくりの場にもなっている「市民学校」、今注目されている話題や、趣味の世界や教養を広げるテーマを取り上げ、生涯学習活動への参加のきっかけづ

くりになることを目指す「市民講座」、五十五歳以上の方を対象に、健康、生きがい、音楽、体操、文学などバラエティーに富んだ内容でこれからの生活をいきいきと心豊かに過ごすための「いきいきセカンド☆ライフ講座」には多くの受講生が集っています。

また、高度な内容でありながら、市民に分かりやすく大学レベルの講座を提供する「高知市民の大学」は、テーマごとにより深く追求するアカデミックな内容となっており、運営委員・講師・受講生の熱意と学ぶ意欲により支えられています。

その他、県内で上映されていない文化の薫り高い洋画作品を低廉に提供する「市民映画会」や、「高知市民頭脳スポーツ大会」では囲碁・将棋・連珠（五目ならべ）・

チェス・オセロの五種目を年齢や国籍関係なく気軽に楽しんでいただいています。

また「高知市夏季大学」は、中央公民館の開館の年にスタートし、市民の生涯学習の場として、知的好奇心の刺激、文化教養の向上、情操の涵養を図ることなどを目的に、政治経済、文化、スポーツ、芸能など幅広い分野で活躍する著名人、有識者の方々に講師を迎え、毎年多くの受講生に学びの機会を提供しています。

【貸室事業】

先に述べた各種講座開催のほか、自発的な生涯学習活動の場を提供するため貸室事業も行っています。

九階には、会議等に使える大小四つの学習室と幅広い用途に対応した和室、露地（茶庭）や水屋を

備えた茶室があります。静かで落ち着いた和室や茶室は、街の雑踏を忘れてほっとできる空間です。

十階は創造活動のフロア。工芸室、彫塑・陶芸室、絵画室、調理室が配置されています。陶芸用の窯や電動ろくろのほか、版画や彫刻に使用する各種工具、調理器具などの備品も充実しており、陶芸窯を除いて、これらの備品はすべて無料でお使いいただけます。

最上階の十一階は音響設備を備えた三室があります。大画面のスクリーン、プロジェクターが使用できる大講義室、グラندピアノがある音楽室、壁一面に鏡が配されたダンススタジオのような軽運動室には更衣室やシャワールームも完備されています。

なお、定期的に公民館を利用し、一定の条件を満たせば、生涯学習サークルとして登録することで、使用料が五割に減免されます。また、多様化、高度化する市民ニーズに対し、幅広い学習機会の提供ができるよう、民間営利社会教育事業者も公民館の使用ができるようになりました。

中央公民館は、社会教育法に基

高知市立中央公民館 貸室のしおり

かるぽーとの中の
中央公民館だよ



こんなことに使える！

学会やコンベンションに！
会議や研修に！
創作活動と交流の場に！

公民館事業として『市民学校』や
『市民の大学』など各種講座も
実施しています。

中央公民館の魅力

こんなところが使いやすい

- ① 6か月前からの申し込みで準備期間に余裕
ができます。
- ② 豊富な貸出備品が無料で使えます。
プロジェクター、調理用品、茶道具、ホワイトボード、
スクリーン、マイク、レーザーポインター、図解機、
複製機 など
- ③ 2階大小ホールや7階展示室との併用で
学会やコンベンションに使えます。
- ④ 予約状況はホームページからいつでも
確認できます。
- ⑤ 中央公民館の生涯学習サークルに登録
すると使用料が5割減額になります。
(登録要件あり)
- ⑥ 一般企業も使えます。ただし一定の要件
があります。

かるぽーと



創作活動と交流の場に！



軽運動室 (マイク使用可)
更衣室・シャワー室
ロッカー・トイレ完備
音楽室 (マイク使用可)
ランドセル/椅子30
机30/椅子30



絵画室
イーゼル・石膏像等が
揃っています
長机8/椅子24
彫刻・陶芸室
電動ろくろや有料の
陶芸室も完備
作業台6/椅子36
工芸室
作業台4/椅子22
調理室
既食テーブル6
各種調理備品や
食器も無料で貸出



茶室
水屋・次の間を含み9.5畳



大講義室 (マイク使用可)
大型スクリーン
プロジェクター
音響設備完備
長机56/椅子168



第1学習室
長机13/椅子37
第2学習室
長机16/椅子46
第3学習室(マイク使用可)
長机22/椅子64
特別学習室(マイク使用可)
長机22/椅子44
第1・2・3和室
28畳が3室
仕切りを外して
広く使うこともできます



学会やコンベンションに！
会議や研修会場に！

づき設置されており、民間営利社
会教育事業者以外の利用申請者は
営利目的での利用ができないなど、
目的により使用制限があるものの、
中心市街地に立地している利便性
を活かし、ホール・ギャラリーと
の併用ができることから、学会や
コンベンション、企業の会議・研

修会場としての利用など、地域の
公民館とは異なった役割も果たし
ています。社内会議、入学・採用
試験等にぜひご利用ください。
なお、貸室についての詳細は、
高知市立中央公民館までお問い合
わせください。

【人生百年時代の公民館という舞台】
日本の平均寿命は、戦後間もな
い一九四七年には男性が50・06歳、
女性が53・96歳でしたが、二〇一
八年には男性が81・09歳、女性が
87・26歳に達し、人生百年時代の
長寿社会が到来しつつあります。
その一方で、こどもの出生率の低
下と相まって全人
口率に占める六十
五歳以上の高齢者
の割合は世界に類
をみないスピード
で高くなっていま
す。個人に目を向
けると、生涯未婚
率の上昇する中、
今後、高齢単身世
帯の急速な増加に
より、社会的な孤
立や貧困層の増加
が懸念されるとこ
ろです。

このような社会
の到来を見据えて、
若者から高齢者ま
ですべての世代の
人々の今後の人生
設計や生き方をど

うとらえるかを生涯学習という観
点から考えてみる必要があると言
われています。
また、生涯学習で学んだ成果を
様々な場で生かすことは、個人の
豊かな人間性や地域の活性化にも
つながることになります。会社な
どの中の間人間関係を基礎とする「社
縁」、親子や兄弟姉妹などのつな
がりを基礎とする「血縁」、住む
地域のつながりに基づく人間関係
「地縁」などが薄れる現代社会に
おいて、公民館での生涯学習活動
によって学習仲間との新たな「縁」
を築きあい、一人ひとりが社会参
画できる人生百年時代を作り上げ
ることが必要であり、その新たな
「縁」の生まれる舞台としての公
民館の役割はますます重要になる
と考えられます。

高知市立中央公民館

所在地

〒781-9529

高知市九反田2-1

お問い合わせ

088-883-5061

うつ病のミュージシャンと連れ添う

秋月 ひなた

私の夫はうつ病でミュージシャンである。病気ではなく、うつ病のミュージシャンと連れ添う妻の視点で書こうと思う。うつ病に対してネガティブな表現も多少含まれるので、不快な気分になる方がいるかもしれないことを先に断っておく。

私と夫は結婚三年目になるが、今となつてはすごい男性と結婚したなと思う。大学進学と共に高知へ移住してきた私を両親は今でも心配していることだろう。

高校生の時、夢は特になかったが、歌って踊る外国のアイドルグループに憧れて「大学では絶対にダンスサークルに入ろう」と思っていた。そして無事高知大学へ入

学したのだが、いざダンスサークルの練習風景を覗いてみると、俗に言う「チャライ」先輩方が多かった。それまで真面目に、当時流行していたルーズソックスも履かず、スカートもひざ丈、昼休みを図書館で過ごしていた私は、雰囲気に向けてダンスサークルの門は叩けなかった。

入りたかったサークルにも入れず、どうしようかなと思っていたところに仲が良かった友達から「よさこいサークルと一緒に行って欲しい」と声が掛かった。

まさに人生のターニングポイントだった。この誘いが無かったら、今どんな人生を送っていたか想像もできない。恐らく夫とも出会っ

ていなかっただろう。

踊るつもりだったし面白そうだったからそのサークルでもいいかなと友達について行き、よさこい一色の四年間を送った。よさこいで踊る楽しさを感じ、大学三年生の後期にはやはり「ダンスがやりたい」と考え、某ダンススタジオに通い始めた。

卒業後は高知の企業で働きながらスタジオに通っていたが、五年ほどしてスタジオのインストラクターに転職した。インストラクターとしてレッスンを行いながら、お祭りなどのイベントにも出演していた。あるイベントの出演者同士がコラボレーションする企画で彼の演奏で踊ったのが私たちの出

会だった。

付き合い始めた当初から夫は重度のうつ病を患っていて、たまにその症状が重く顔を出すという事は聞いていた。それを聞いたのが二〇一五年の秋だったので、世間的にも病気は広く認知されていたと思う。勤務先にうつ病が原因で退職した後輩がいたり、その時の自分の感覚としてはうつ病に対してそう遠い印象はなく、理解があるつもりでいた。

私と夫は付き合い始めてすぐに同棲を始め、二〇一六年の秋に入籍。夫はミュージシャンという職業なので、サラリーマンの様に毎朝同じ時間に起きて出社するというようなルーティーンが無い。数日外出しないことも珍しくなかった。布団から出てこず、無気力な様子で数日間外出していない状態になるまで、私もうつの症状がはじめていると気付かなかった。そもそも「不安定な暮らし」のミュージシャンなので、夫には固定の収入も休業手当もない。家計はいきなりピンチである。

まず腹が立った。私たちはミュージシャンとダンスインストラク

ターという夫婦だ。収入的にはかなり柱の細い夫婦であるのにどういふつもりかと何度も問いたたし。それでも家から出る様子が無い。それがうつ病の症状だと理解してはいたのだが、何というか初めての状況に心が対応できていなかったのだと思う。どれだけ真剣に話し、訴えても反応がない。日に日に減っていく生活費。家賃に對する不安。解決の仕方が分からない問題と向き合うことが辛い日が続いた。病気のせいだと分かっているても、優しい言葉を掛ける余裕がなかった。

ある日、深夜に夫が奇声を上げて暴れ始めた。今思い出すと笑ってしまうが、その時は驚きと恐怖だった。夫を必死でなだめたような記憶はあるが、自分が何を言ったのか、どのように治まったのかは思い出せない。治まった後は泣きながら「辛い」「苦しい」「死にたい」といった内容の話を延々と聞かされた。まるで現実感がなかった。その日は仕事だったのだから準備を始めると「こんな状態の自分を置いて仕事に行くのか」と言われた。何とかなだめ

て仕事に行った。满身創痍でよっぽど酷い顔だったのだろう、生徒さんにも心配され、必死で泣くのを我慢した。

レッスン後に義母と会い、夫の症状が季節の変わり目で重くなりがちで、特に冬から春の変わり目はそうなり易い事、うつ病は病気である事と、どうしてもその時は息子だけ実家にやってくれて構わないと言われた。

そう言うってもらって気持ちが楽になるとか安心したとかはあまりなく、家に帰ってからの現実を想像するとやはり気が滅入った。帰宅途中は、うつ病に對しての認識と覚悟が甘かった自分を認め、お金の工面のことを考えていた。そこからまた数週間は打開策もなく過ごした。認識の甘さを反省し、ネットや書籍で自分なりに調べたが、気の持ち方では回復しません、薬物治療が有効、安心して休める環境を整えましょう、時間をかけて、焦らず、ゆっくり治療に寄り添いましょう…それらの情報は虚しく私の頭上を飛んでいった。お金がないので病院に行くこともできないうつ病を掛けていたら二

人とも飢え死んでしまう。本当に困り果てたが、「ウジウジしていても治らないし、とりあえず出来ることをやるしかない」という考えに至った。うつ病には軽い運動が大変有効、という情報を目にしたので、夜中に夫を無理やり家から引きずり出して、職場のスタジオでエアロビクスやダンスをして体を動かした。

私たち夫婦にとって、音楽とステージが助けとなり、夫の症状が重くなり始めた一月以降、三月に開催するイベントの段取りをしていくうちに症状は徐々に回復していった。実際はイベントの有無ではなく、単純に季節の問題だったのかもしれないが、その時ポロポロだった私たちにとって、同じ目標に向かって意見を交わすことはとても意味があったと思う。

症状が回復して、これからどのようにに病気と向き合っていくか話し合い、「症状が出ていない期間に積極的に仕事を増やし、症状が出やすい冬から春にかけての仕事をあえて多目に入れておく」と決めた。というのも、私が初めて夫のうつ病と対面した時期はステ

ジでの仕事がほとんどなかったからだ。普段であれば、仕事が取れない月には積極的に営業活動し、何かしらの仕事を獲得して来る。しかしうつ病が顔を出したタイミングと仕事がないタイミングが重なり「仕事がない、取らなければいけない」という不安とストレスがうつ病の症状を助長したのではないかと考えたのだ。会社に勤めるサラリーマンなら、うつ病の期間に働くことは回復を遠ざける要因になる。夫はミュージシャンだから音楽の仕事だ。うつ病の出やすい期間に出演や作曲の仕事を入れるという判断が正しいかはわからないが、とりあえずやってみようという話になった。

また、症状が出ていない時期の話し合いでは、夫はたまに「音楽を辞めて、他の仕事を探そうか」と言う。確かにミュージシャンの収入は不安定だ。生活を考えそう言うてくれているのは嬉しいが、音楽を辞めて夫が人の形を保っていられるのだろうかと思う。夫を救っているのも音楽であり、私たち夫婦がポロポロの時に繋いでいてくれるのも、いつも音楽やステ

ージだ。病氣ありきで二人の人生を楽しむには、音楽やステージは決して取り除いてはいけない因子だと感じている。

辛いときは、自分がとても多くのモノを夫の為に消費しているように、同世代の友人の生活と比べ惨めに思う事もある。けれど、瞬間的な不安や不満を取り除いてみれば、夫と夫婦になったおかげで得られたものも沢山あると気付く。それらは音楽に由来するものばかりだから、私は「音楽以外の仕事を探す」ことに反対する。私はうつ病のミュージシャンと連れ添ったのだ。私たちが少しずつ築いている「私たちらしい」生活では「うつ」と「音楽」は切り離せないのだ。

読者の中に、家族がうつ病の人がもしいたしたら、あなたはものすごく頑張っていて、その行いは愛に溢れていて、あなたの存在は尊いと伝えたい。うつ病だけに限らないが、「病氣になった」本人が「一番辛いんだ。君がもっと理解してあげなきゃ」と他人に言われることがある。けれど、病氣になった家族をサポートする私たちも「本人」だと私は思う。病氣

の症状は一人一人違う、患っている人の性格も家庭環境も違う、そこにサポートする側の性格や環境も掛け算されるのだから、その人が感じる辛さはその人にしか分からない。自分にとっては「自分が一番辛い」でいいじゃないかと私は思う。

私は、家族がうつ病の人なら一度は見たことがあるであろう『うつ病の家族に言ってはいけない言葉』に載っている言葉を、自分が限界の時にはあまり我慢せず言っている。その一言を我慢して、自分自身がダメになってしまふより、一旦スッキリさせた方が長期的に夫と過ごせると思うからだ。医者からは怒られるかもしれないが、お互い人間なのだから、思いやりや愛があればたまには悪態をついてもいいだろうと思っている。

出口が見えない日々に助けを求め、ネットや本を開くと「家族や周りの人がサポートできること」はいくらでも出てくるが、家族や周りの人をサポートする情報や癒しの言葉はものすごく少ない。世間から孤立したような気分になる。厚生労働省が実施している「患者調査」には生涯に一度はうつ病に

かかる人は十五人に一人というデータがある。つまりサポートしている人も最低十五人に一人はいるということだ。もしあなたがその十五人の一人だったら、同じ立場として、具体的なアドバイスが何一つできないのは情けないけれど、この場を借りて称賛と激励を贈りたい。

現在私はインストラクターも辞め、夫の立ち上げた会社を手伝っている。突然奇声を上げて暴れ始めたような症状にはあれ以来出会っていない。それでもやはり季節の変わり目にはちよこちよこと重いうつ病の症状が顔を出す。症状が出て三日くらいは優しく接することができ。いくら知識として理解していても、家族として優しく接し・見守らないといけないと思っても、働किながら家事を全てこなし、明日の生活に頭を悩ませる日々が続くと、日がな一日布団の中から出られない夫の姿に腹が立ってきてそのイライラは言葉や態度に出始め二人とも傷つく。その繰り返しだ。けれど決して停滞はしていない。症状が出るたびに、私たちは傷付けあってはいるけれど、反省と学びを重ね少しずつ

つ前進している。いつ重い症状が出ても構わないように仕事を共有し、お互いにカバーできるようなシステムを構築していつている。この原稿を夫に見せると、真剣な顔で「僕と結婚しても良い事が無いように思える。離婚したいの言い出せないのか?」と言われて笑ってしまった。辛い日々を隠して否定したくなかったので、そんな部分ばかり書いてしまったかなと少し反省している。どんな家族にも一つや二つの問題はあはずだ。私たちの夫婦生活にはうつ病というちよとしたお邪魔虫が居候しているだけ。

私はこれからも、うつ病のミュージシャンと連れ添う人生を楽しみたい。

あきづき ひなた

一九八五年生まれ高知市在住

「アンテナ」

デハラユキノリ氏との出会い



下尾 仁

周波数を合わせれば、いろんな人と出会い繋がる事ができる。アンテナを高くたて沢山の人と繋がる。

二〇〇二年、友人から「マイケル、ギャラリーファウストで面白い個展をやっているので見に行こう」と誘いを受けた(当時、何故かこの友人だけが僕の事をマイケルと呼んでいた)。友人に誘われるまま個展会場へ行き、作品を見るとぶっ飛んでしまった。粘土で作られたキモくてグロくてエロくてカワイイ五十体程の作品。そう、作者はフィギュアイラストレーターのデハラユキノリ氏。この時、初めてデハラさんを知ることになる。

作品には一つ一つに絶妙なキャラクター名と解説が書かれ、僕は

なんともいえないデハラワールドに引き込まれていった。個展会場にはデハラさん本人もいるが、気安く話しかける事などできず、会場を後にした。

しかし、どうしても作品の事が頭から離れず、後日会場に行って作品を一つゲットさせてもらった。それから毎年個展を見に行ったが、なんとも面白かったのが、オープンングパーティーでのデハラさんによるパフォーマンスであった。時にはブリーフ姿で踊ったり、別の日には刺身の女体盛ならぬ、デハラさん自身がお皿に盛られて登場するなど、ぶっ飛んだパフォーマンスでオープンングパーティーを盛り上げていた。僕は、いつかデハラさんと知り合いになり、このオープンングパーティーで一

緒にパフォーマンスができれば：などと密かに思ったりした。

その後も毎年個展を見に行き、ちよつとずつ距離を縮めていった。二〇一五年に公開された映画『あらうんど四万十カルニカーラン』では、デハラさんとはシーンが違ったが同じ日の撮影という事もあり、宿泊は同じ部屋に。ちよくちよく飲みに行くようにもなり、なんと昨年はデハラさんのラジオ番組『ヨルラジオ』に月一回呼んでもらえるという奇跡的な展開に!!

そして、なんとなんと二〇一九年、夢であったオープンングパーティーでのパフォーマンス出演。内容は三十年前の鏡川周辺を舞台にした、デハラさんの同級生(「ジャスミン」が女子高生(「筆者」に恋心を抱いてストーカーまがいに付け回し、ジャスミンはデハラさんに相談するも成就せず、鏡川で女子高生を待ち伏せし、「こんなに好きなんだー!」と鏡川に飛び込んで告白するも女子高生は自転車で走り去っていく...という映像から始まる。映像が終わると話は現実に戻る。

現実では、ジャスミンとデハラさんは飲み屋で三十年前の話をし

ている。そしてデハラさんはあの子の女子高生を今日は呼んでいると言い始める。あの純粹無垢った女子高生はとんでもないおばちゃんになっていて、三人で飲んでるうちにおばちゃんは眠ってしまい、デハラさんは眠るおばちゃんの体に絵の具を塗り、ジャスミンは謎のダンスを踊る。おばちゃんが目覚めたとき、寝ぼけて倒れこんだところにはちようどキャンバスがあり、体に塗られた絵の具がキャンバスに写る。おばちゃん起き上がると、鏡川や筆山が描かれた絵が完成する、というパフォーマンスだった。

反省も多い内容だったが、念願だったデハラさんとのパフォーマンスができた。いちファンであった僕が、今ではラジオに呼んでもらったり、一緒にパフォーマンスをやったり、本当に奇跡のような事が起こっている。この勢いで宝くじでもあたらないかなあ。

しもお ひとし

一九六九年生まれ
岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

3 ～ 4 月の事業から

第三十五回写真コンテスト・高知を撮る

平成三十一年三月十九日（二十四日、か
るぽーと市民ギャラリーにて、「第三十五
回写真コンテスト・高知を撮る 入選作品
展」を開催しました。

今回は、九十六名の方から三百二十四点
の応募があり、審査の結果六十五点を展示
しました。

本コンテストは、過去から現在に至るま
での県内の出来事や風景、人々の暮らしを
写真で記録し、高知の様々な表情を伝える
ことで未来の高知について考えようという
趣旨で開催しています。

記録写真部門・昭和以前の部では、昭和
最後の日の高知市内中心部を撮影した「昭
和六十四年一月七日昭和最後の日」が特選
に選ばれました。この作品は、平成から令
和への改元が大きな話題となっている今回
ならではの作品でした。平成の部では、廃
棄場の大量のゴミやビン、粗大ごみを撮影
した「何処へ…リサイクル&リユース」が
特選に選ばれました。

I LOVE 高知部門では、浜辺で元氣
にジャンプする友人たちとの一瞬を撮影し
た「はちさんは土佐から!」、高岡郡津野
町の明王寺で魔除けとして作られている大
草鞋を作る過程や縄で遊ぶ子どもを撮影し

た「大草鞋の
里」が特選に
選ばれました。

来場者は、
幼少期に住ん
でいた地域を
懐かしんだり、
きれいな風景
や楽しそうな
子どもたちが
写った写真を
見て楽しんで
いました。

現在、記録写真部門は昭和以前の部と平
成の部に分けて応募を受け付けていますが、
第三十六回は令和になってからの写真も応
募対象となるため、部の分け方について検
討の必要性を感じています。

これからも「こんな高知の姿もあるんだ
な」といった新しい高知や歴史を感じられ
る高知など、様々な視点で撮影された作品
を募集し、入選作品はたくさんの方にご覧
いただけるコンテストでありたいと思いま
す。

（入場者数・六百九十二名）



高知市立中央公民館事業 第50回高知市民頭脳スポーツ大会

今年も高知市民頭脳スポーツ大会を開催します！種目は、囲碁、将棋、連珠（五目ならべ）、チェス、オセロの5種目（1人1種目とし、2種目以上に参加した場合は失格）。高知県内在住または県出身者であれば、どなたでも参加できます。各競技とも優勝、準優勝の方には賞状と副賞があります。

日 時：2019年6月16日（日）9:00 受付開始、9:30 競技開始

会 場：高知市文化プラザかるぽーと中央公民館

参加費：大人300円、18歳以下200円

【お申し込み・お問い合わせ】

公益財団法人高知市文化振興事業団「頭脳スポーツ係」

〒780-8529 高知市九反田2-1 電話：088-883-5071 メール：kikaku@kfca.jp

応募締切：6月11日（火）



高知市文化振興事業団

第七十一回高知市文化祭開幕行事

「大正琴でつづる日本の曲」

平成三十一年四月十四日、かるぽーと大ホールにて第七十一回高知市文化祭開幕行事「大正琴でつづる日本の曲」を開催しました。

第一部では、大正琴あじさい会の皆さんによる「翼をください」「昴」といった有名曲の演奏のほか、岡田直也さん、大井政子さんの歌、藤間紫公さん、藤間公佳さんの踊りに合わせた曲の演奏など全十三曲を大正琴のアンサンブルでお届けしました。

第二部は、安芸市出身の作曲家で数多くの童謡を生み出した弘田龍太郎の没後を舞台に、妻ゆりとお手伝い八重が顧みる、龍太郎の在りし日を描いた演劇を上演しました。龍太郎の娘たちを安芸児童合唱団「はまゆう」のメンバーが演じ、大正琴の演奏に合わせて合唱しました。本作品は、二〇〇〇年に「はまゆう」の十周年記念公演でも上演されており、久しぶりの再演となりました。

子どもたちのかわいらしい歌声や振り付けに微笑ましい様子で鑑賞されるお客さんが印象的でしたが、客席での許可を得ない写真撮影が多くみられ、鑑賞マナーについて



て考えさせられる公演でもありました。保護者の方やお知り合いの方など撮影された方の気持ちも理解できます。関係者には撮影ブースで撮った写真を販売するなど、鑑賞マナーの向上に向けて取り組んでいかなければならないと改めて実感した一日でした。

〈入場者数 四百名〉

高知市文化振興事業団サポーターズクラブのご案内

Cul^{カル}チャーず

多くの方の入会をお待ちしております。私たちの文化を、一緒に創りましょう！

特典 ①年間1公演招待 ②公演チケットの割引販売 ③横山隆一記念まんが館企画展招待 ④「文化高知」の送付
会費 1年間3,000円(4月1日～3月31日、年度途中での入会でも3月31日まで)

お申し込み・お問い合わせは、高知市文化振興事業団 088-883-5071 まで



高知を撮る

第35回写真コンテスト入賞作品

にわとり

鶏おじさん

(平成30年 4月27日 仁淀川町加枝)

山中 清一

頑固に自分の意志を貫きにわとりを育てるおじさん。玉子は多くの人々に愛される。人呼んで「鶏おじさん」。

歴史上の人物に一瞬なりきる。これが歴史小説を読む醍醐味だ。

長宗我部元親になって戦国時代の四国を統一する。真田幸村になって徳川方の大軍十五万を大坂城でむかえ撃つ。坂本竜馬になって海援隊を結成し、大政奉還を実現させる。あるいは諸葛孔明となって、曹操率いる八十万の大軍を赤壁に破る。一見誇大妄想みたいだが、作品に没入するところという至福のひとときが訪れる。

もちろん歴史小説にはフィクションも含まれている。けれど歴史の専門書からは伝わって来ない臨場感がある。一度でもこの経験―歴史を内側から生きる―という経験をした人は、生涯「歴史」を愛し、過去の出来事から多くの教訓を学ぶことができるだろう。

ちなみに、長宗我部元親は『夏草の賦』（司馬遼太郎）、真田幸村は『真田太平記』（池波正太郎）、坂本竜馬は『竜馬がゆく』（司馬遼太郎）の主人公。諸葛孔明は『三国志』（吉川英治）の主要人物である。

一方時代小説は、歴史小説とすこし違う。例えば、架空の人物が登場

歴史・時代小説の魅力



風俗歳時記

する。江戸の長屋に生きる名もなき庶民達、暗い過去を持つ浪人者、妖しく美しい花魁達、大泥棒、女すり、凄腕の用心棒、闇を走る忍者達。果ては、「仕掛け人」と呼ばれる殺し屋集団まで……

時代小説は、歴史を舞台にした一種のファンタジーと言えるかもしれない。作家の想像力がつくり出す世界観に―それは江戸時代や戦国時代とい

う「おなじみ」の世界ではあるけれど―読者も空想の翼を広げてひたることが出来る。

史実を重視する「歴史小説」とフィクションを主体とする「時代小説」。両者を厳密に区別する必要はないだろう。例えば、池波正太郎の『真田太平記』は、一面では真田家の興亡を描いた歴史小説だが、もう一面では「草の者」と呼ばれる忍者達が活躍をする時代小説である。そんな作品は多い。

大政奉還と明治維新から百五十年という区切りの年を終えた今、歴史・時代小説の大ブームが起きていることを願っている。

(本の虫)



第71回高知市展 先端美術研究会
現代美術二等兵
講演会

「たどり
ついたら
いつも駄美術」

第71回高知市展にあたり、「現代美術二等兵」のお二人による講演会を開催します。
職業と制作活動の両立やものづくりの楽しさについてお話しいたします。
ぜひご来場ください。

【日時】2019年5月26日(日) 開場13:30 開演14:00

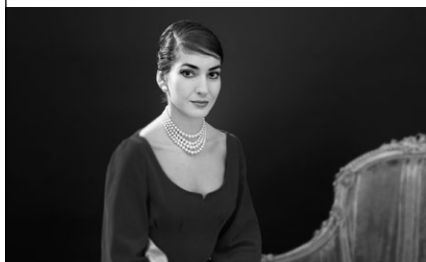
【会場】高知市文化プラザかるぽーと 9階 第3学習室

【料金】無料

【主催】公益財団法人高知市文化振興事業団

【お問い合わせ】高知市文化振興事業団 088-883-5071

高知市立中央公民館事業 第188回市民映画会



©2017-Eléphant Doc-Petit Dragon-Unbeldi Productions-France 3 Cinéma

市民映画会は、文化の薫り高い劇映画を低廉で提供し、教養の向上を図ることを目的に1951年より開催している歴史ある映画会です。

【日時】
2019年6月21日(金)、22日(土)
「私は、マリア・カラス」
11:00～、15:20～、19:35～
「判決、ふたつの希望」
13:15～、17:30～

【会場】
高知市文化プラザかるぽーと 大ホール

【料金】
全席自由
一般 前売り1,300円 当日1,500円
割引 前売り1,000円
(学生証、長寿手帳、障害者手帳など)
※1枚のチケットで両作品を鑑賞できます。

【お問い合わせ】
高知市文化振興事業団 088-883-5071

風伯

貧乏人の部屋

ば、なにかの役にたつかも知れないと、次第にモノが増えてきた。自分の周りにモノが増え雑然となるにつれて、自分の思考がしづらくなって、クリアで明晰な思考がしづらくなっていく。これまで、ひとつの仕事が入るたびに、取り敢えずパソコンのある仕事机の周辺だけを片付ける癖があった。私が机の上を片付け始めると、

最近、自分の周囲に限っていえば、いろんなモノ、モノ、モノで溢れかえっている。どうにも收拾がつかない。なんでこれほどガラクタが増えてしまったのか。そもそもトラंकヒひとつだけのモノで充分だったはずだし、そうありたいということも嘗て書いた。老人の癖で、モノを捨てられなくなっていることに気づく。捨てずにとっておく

これからあたらしい仕事を始めるという合図になっていた。机の上だけでもスッキリすることで、仕事に集中できるような気がしたからだ。が、最近はその机の上でさえ片付ける余裕がなくなっている。末期症状である。ふと、なにかのきっかけで、「貧乏人の部屋」ほどモノで溢れている」というような意味の言葉が目に入ってきた。うーん、たしかに部屋はガラクタで溢れかえっている。貧乏人であることも確かに間違っていない。逆にいえば、お金持ちほど部屋がスッキリと片付いているということだろう。ガラクタでいっぱい部屋も部屋だが、高級な家具だけでスッキリしている部屋も、私には落ち着かない。結局は貧乏人の性なのだろうが、いまはもう、雑然としたなかにも秩序があれば、それはそれでいいのでは、と腹をくくっているのだが……

(森)

今号の表紙

遠くの王様

松下 健太

遠い海の底に生きているくじらが一瞬だけ雄大な姿を現した瞬間をイメージしてつくりました。

スタンドグラス風にすることで、海の透明感を表現してみました。

(まつした けんた /
国際デザイン・ビューティカレッジ2年生)

第71回 高知市展

アンデパンダン

絵画〔洋画〕
日本画
書道
先端美術〔立体〕
彫刻
陶芸
工芸
写真
ペン字
デザイン
北見市美術交流作品

2019
5/25 土 6/9 日

午前9時▶午後6時〔月曜休館〕
初日▶午前10時開場／最終日▶午後5時終了
高知市文化プラザかるぽーと
〔7階市民ギャラリー〕

入場料▶前売300円／当日400円

療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・身体障害者手帳の各所持者と
その介護者1名、及び長寿手帳所持者と高校生以下は無料

前売券販売所▶かるぽーとミュージアムショップ 088-883-5052
高新プレイガイド 088-825-4335 ほか

〔作品搬入〕

日時▶5月19日〔日〕・20日〔月〕午前9時～午後5時

会場▶高知市文化プラザかるぽーと〔7階市民ギャラリー〕

出品料▶1部門につき一般1,500円／学生1,000円

お問い合わせ 公益財団法人高知市文化振興事業団 088-883-5071

主催：高知市展代表委員会・公益財団法人高知市文化振興事業団・高知市教育委員会 共催：高知新聞社／NHK 高知放送局／RKC 高知放送／KUTV テレビ高知／KSS さんさんテレビ

デザイン▶片岡 榮 等



会期中、本チラシをご持参の方は前売料金〔300円〕でご入場できます